

—50周年記念シンポジウム「色彩はいかに社会に貢献してきたか」—

人と衣服—その色彩の社会への貢献—

今井 弥生 東京家政学院短期大学

はじめに

衣食住の生活において衣服は人間だけがもつ特性である。他の動物には見られない。殆どの人は、いつ、どこでも着用しなければならない。

人は、なぜ衣服を着るようになったか。人、衣服、色彩、環境の視点で探りたい。

考察

聖書¹⁾ 創世記に「神が禁じた善悪、知識の木の果を食べた男女は裸であることを知り、いちじくの葉を綴り合せ腰におおいをつくった。主はアダムと妻エバに皮衣を着せた。」…また、出エジプト記に「主がモーセに命じ聖所に仕えるアロンの式服を青色、紫色、緋色の撚り糸で織った亜麻布で装束をつくらせた。」とある。

考古学的な調査^{2) 3)}によると 150 万年前に熱帯地方からユーラシア大陸の各地へ移住を始めた採集・狩猟民は寒さを凌ぐために獣皮をそのまま被覆に使ったと推定される。後期旧石器時代(4万～1.3 万年まで)のクロマニオン人は骨針で皮革から衣服を縫い、動物の骨や歯牙を紐に通して首に飾ったといわれる。そして、1 万年前に始まる新石器段階にあった日本列島の縄文時代には植物繊維を利用して編んだ布が使われていた。草木染も行われたといわれる。

現在の服装規範では古典に基づく羞恥説は、エチケット、モラル、タブーといわれる。儀礼説は冠婚葬祭における喜び、悲しみの色彩象徴が慣習として厳格に継承されている。考古学的な身体保護説は環境に対応する感覚感情で寒暖、快・不快、安全色の広範囲になり、装飾説は自己の美的表現、集団の性格、ファッション、風俗など感性に及ぶ。

最近の話題

衣服の色彩は心のメッセージ

1993 年、皇太子殿下、雅子さまのご成婚を祝って「慶祝カラー」8 色が発表された。

「紅」は慶祝、「藤紫」は日本の伝統と高貴さ、「黄水仙」は希望、「桜」は幸福感、「若竹」は若々しさ、「オックスフォード・ブルー」と「ハーバード・クリムソン」はお二人が学ばれた大学の伝統色にちなんで命名。グローバルな

ご活躍への思いが込められている。慶祝カラーは服飾におけるファッションカラーだけでなく、公共的な空間にも効果的に活用された。

弱者に優しい衣服の色彩

高齢社会が進行している。健康な人でも加齢に伴う正常老化は避けられない。夜間の交通事故防止に黒っぽい服は禁物、着用するときは白、クリーム、ベージュの帽子、スカーフなどを対比色に用いる配慮が必要。発光性の色素で染色した素材は効果的である。

子供の通学時の黄色の帽子、傘、ランドセルカバーは明視性が高く安全色として定着した。

白の手術着は、なぜ緑系になったか

白い壁面、白い服に赤の残像で緑が現れ、悩まされた医師を助けた色彩学の成果である。

柔道着の白、伝統にはそれらしきがある

国際柔道連盟は判別しにくい理由で色付き柔道着を提案し、対抗策として日本の柔道衣研究委員会は色付き畳を提案した。1996 年のことである。

グローバルなカラーコミュニケーション

1998 年、冬季オリンピック史上、最南の開催地「長野」で 72 国の選手、関係者、観客が集まった開会式。各国の色彩が違ふ民族の特色を楽しんだ。日本の色彩もこれまでとは違ふ。環境を意識し機能性とバランスのとれたツートンカラーである。自然界を大切にしたい日本の色彩を見直す色返りと思われる。カラーアイデンティは国際社会に著しく貢献した。

おわりに

人類は衣服の色彩を手段として豊かな生活文化を確立させた。色彩のイメージ、シンボル、サイン効果は、21 世紀に向けて世界への「かけ橋」の役割を果たした。

文 献

- 1) 関根正雄訳 (1997)：旧約聖書、岩波書店
- 2) 尾本恵市 (1996)：分子人類学と日本人の起源、掌華房
- 3) ソレッキー・R・S 著、香原志勢、松井倫子訳 (1977)：シャニダール洞窟の謎、蒼樹書房